

月船禅慧の研究 ―― 訓註 『武溪集』 ――

鈴木省訓

はじめに

初め栄西（一一四一―一二一五）によつて伝えられた臨済禅は、その後、中国からの渡来僧によつて純粹な宋朝禅が伝えられたのである。この禅は、鎌倉を中心に栄えた。その代表的な人物は、建長寺の開山である蘭溪道隆（一二一三―一二七八）と円覚寺の開山である無学祖元（一二二五―一二八六）の二禅師である。この二人の禅僧によつて、鎌倉に純粹な臨済禅の基礎が築かれたのである。しかし、蘭溪・無学を中心に発展した鎌倉禅も時代を経るに随いその活力も衰退していったのである。

江戸時代、円覚寺中興の祖である誠拙周樗が円覚寺に入寺した時、円覚寺の荒廃ぶりは、相当なものであり、それは誠拙伝によつても知ることができる。衰退した鎌倉禅は、この誠拙の系統の禅が鎌倉の地に根づき発展したのである。

鎌倉禅を復興した誠拙が円覚寺に出世するにあたり、古来より月船の推挙に依ると言う。月船は、古月下の禅匠である。鎌倉に古月禅が伝承されたのは、月船・誠拙の父子二代の力によると言える。この月

船禅慧についての伝には、詳細なものがなく、『近世禅林僧宝伝』も『武溪集』の序文にある月船伝に依つたものであり、それ以上のものではない。そのため月船の人物像を知る手掛かりは、月船の偈頌集である『武溪集』に依る以外はないのである。そこで、今回より、月船の『武溪集』に訓註を施しながら、月船について考察することにする。

この偈頌集を見るにいくつかの疑問が生じてくる。それは、月船が古来から言われる古月下の人なのであるかという点である。それは、大応・関山・白隠などに対する偈頌はあるが、北禅に対するものがないのである。ただ一つ「先師忌」と題されるものがあるが、これは嗣法した東溪智門のことであると思えるからである。

月船の偈頌の理解は、月船が古月禅を承けた人であるか、又、月船がどのような人物であったのかを知る重要な資料であると言える。尚、読み方に関しては、版本の送り仮名に順じて、なるべくそのままに読んでおくことにした。

武溪集 乾

大凡頌古所以發揮先德淵奧而謂之繞路說禪者何非是老婆落草之謂全體受用則奢儉得所事理俱到雖語帶廉纖人不得而窺時或似惹爾情解者夫是謂之繞路

大凡そ、頌古は、先特の淵奧を發揮する所以にして、之を繞路を説く(2)と謂う者は何ぞや。是れ老婆落草の謂に非ず。全體受用するときは、則ち奢儉(4)所得。事理俱に到る。語、廉纖を帯びると雖ども、人、得て窺わざる時に、或は、爾が情解を惹くに似る者の、夫れ是れ之を繞路と謂う。

(1)残らず明らかにする。(2)『碧巖錄』第一則に「大凡右只是繞路說禪」とある。繞路は曲がりくねった路。遠まわしに禪要を説くこと。(3)老婆心を以て人を教化するため、實際に即して法を説くこと。(4)奢はおごる、ぜいたく、儉は、つつましくする、むだをはぶく。(5)こまかい。こまごましたこと。小事にかかわること。

豈有別路乎繞路中有直路直路中有繞路達者知焉所謂事理俱到者譬如打索兩股緊緩不同則堪作什麼古人以有沒字見之親疎惟親惟疎只須狐疑淨盡然後事理親疎抑揚殺活精密者痛快據款結案者佛祖機緣皆用得者或以金剛王一揮者或通線路畧露風規者任手拈來不滯一隅雖則如此癡人面前不可說夢多見今時作偈頌胡亂指注信口妄說悲夫如上一絡索吾老師指示諸徒一時之說也

豈に、別路有らんや。繞路中に直路有り。直路中に繞路有り。達者は知る。謂う所の事理俱に到るとは、譬えば索を打するが如し。兩股の緊緩同じからざるときは、則ち什麼を作すにか堪えん。古人、有沒の字を以て、之が親疎を見る。惟れ親、惟れ疎、只、須らく狐疑淨盡すべし。然して後に、事理、親疎、抑揚、殺活、精密なる者、痛快なる者、款に拠つて案を結する者は、佛祖の機緣、皆な用い得る者、或いは金剛王を以て一揮する者、或いは線路を通じて、略して風規を露わす者、手に任せて拈じ來つて一隈に滯らず。則ち此の如くなりと雖ども、癡人の面前に夢を説くべからず。多見し今時偈頌を作る。胡亂に指注し、口に信せて妄説す。悲しいかな。如上の一絡索は、吾が老師の諸徒に師事する一時の説なり。

(1)疑い深く決心のつかないこと。(2)『碧巖錄』第一則に「拈古大綱提款結案而已」とある。罪狀にしてがつて判決を下すこと。(3)風習についての一宗のきまり。(4)おろか者の前では、夢の話をしてはならない。見識の浅い者の前では、めったなことを話題にしてはならない。(5)疑わしいこと。怪しいこと。(6)文章の一段、一節のこと。

老師諱禪慧字月船興州田村郡小野人也投郡之高乾北禪才老落髮受具游方之後嗣法東溪門公住受業院者僅十許年退寓武之東輝菴三十七年恬如一日天明改元六月十二日春秋八十安祥而化門人包裹遺骨歸葬本院旭曾侍巾瓶殆二十年以紙為衣竊錄其偈頌得三百餘首同社諸衲剽聞傳寫流乎江湖魯魚之誤不為不多是以旭意願繡梓不敢出口何幸滅後有勇義之人速授剽削氏命曰武溪集分為二本使旭為序辭讓不

允嗟乎如師所謂繞直親疎固非吾輩可得而評矣只筆疇昔所聞之說以冠卷首云

天明壬寅春三月奥州相馬長松寺住持物先海旭焚香拜書

老師、諱は禪慧、字は月船。奥州田村郡小野の人なり。郡の高乾、北禪才老に投じて落髮受具す。游方の後、法を東溪門公に嗣ぐ。受業の院に住すること、僅かに十許年。武の東輝庵に退寓すること三十七年。恬として一日の如し。天明改元六月十二日、春秋八十、安祥にして化す。門人、遺骨を包裹して、本院に帰葬す。旭、曾って巾瓶に待ること二十年。紙を以て衣と為し、竊に其の偈頌を録し、三百餘首を得たり。同社の諸衲、剽聞伝写して、江湖に流る。魯魚の誤り、多からずと為さず。是れ以て、旭、意に梓に繡らんと願えども、敢えて口より出さず。何ぞと幸いにして滅後、義に勇むの人有り。速やかに劖劂氏に授け、命じて、武溪集と曰い、分けて二本と為す。旭をして序をつくらしむ。辞讓すれども允さず。嗟乎。氏き謂う所の繞直親疎の如き、固く吾が輩の得て評す可きに非ず。只だ疇昔聞く所の説を筆して、以て卷首に冠らしてむと云う

天明壬寅、春三月、奥州相馬長松寺、住持物先海旭焚香拜書。

武溪集卷上

參學比丘海旭編

武溪集 卷上

參學の比丘 海旭編

(1)月船の偈頌に「誰が家の吹笛ぞ、雨、森を成ず、五月の海南毒淫多し、行け、曾って君が為に説かず、老僧、猶、武溪の深に在り」「鳥度らず、獸臨まず、天南天尽きて武溪深し、老僧八十、頭雪の如し、人の道う、此の居毒淫多し」という偈によって名付けられたという。月船の住した東輝庵（現・横浜永田町宝林寺）の地、武州によって付けられたとも言う。

偶成

大水小水歸東海 一日二日沒西阿 如今巴峽猿啼處 落葉開門月色多

偶成

(2)大水小水、東海に歸し、一日二日、西阿に沒す。
(3)如今、巴峽猿の啼く処、落葉、門を開ければ月色多し。

(1)ふと思いついたままにできた作品。註には、この時、月船が甲州に居たとある。(2)『尚書』の「大伝」に「大水小水東流して海に歸す」とある。中国は、東側に海があり、どのような川の流れも東の海に向かって流れていくことを言う。(3)『尚書』の「皋陶謨」に「一日二日に万機あり」とある。(4)『佩文韻府』の張融の海の韻文に「天暉を東曲に抗ち、日倒して西阿に垂る」とある。西のはずれ。(5)山の峽谷で鳴く猿。仏鑑慧勸の頌に「曾って巴狹猿の啼く処を経て、鉄作の心肝も也た断腸」とある。

遠遊

青山萬疊水千里 遊人得得行不止 將謂拄杖活如龍 而今力盡難提起

遠遊⁽¹⁾

青山萬疊、水千里、遊人、得々として行きて止まらず。
將に謂えり、拄杖活して龍の如しと、而今、力尽きて提起し難し。

(1)遠く旅をする。家から遠く離れてよそへ行く。(2)青々と樹木の茂っている山。(3)いく重にもかきなりあう。(4)旅人。(5)中国の方言で特地と同じ。『禪月集』に「千山万水、得々として来る」とある。わざわざ。ことさら。(6)くだと思ひ違ひをする。くだと誤解していた。(7)いきいきとしている。拄杖の働きの自在無碍であることを龍に喩える。『碧巖錄』六十則に出づ。又、廬山の棲賢寺の辯首座の偈に「艸鞋擲して虎に似る。拄杖活して龍の如し」とある。(8)もち出す。

住庵

曾自江西行脚還 十年風雨掩柴關 常公不識庵中趣 又捲荷衣出暮山

佳庵

曾⁽¹⁾つて江西⁽²⁾自り行脚して還る、十年、風雨柴関を掩⁽³⁾う。
常公は識らず、庵中の趣を、又、荷衣を捲いて暮山を出づ。

(1)これまでに。以前に。(2)長江中流南側の地。馬祖道一を指す場合もある。ここでは、単に諸国と言うこと。(3)柴で作つて出入口。(4)おおう。とじる。(5)馬祖道一の法の大梅法常のこと。大梅の偈に「一池の荷葉、衣尽きること無く、数樹の松花、食余り有り。剛て世人に住処を知られて、又、茅舎を移して深居に入る」とある。(6)はすの葉で作った衣服。隠者の衣服を言う。

又

蓮華峯北竹溪南 借箇蒲團坐艸庵 將謂山中無一事 又隨月色下煙嵐

又

蓮華峰の北、竹溪の南、箇の蒲團を借りて艸庵に坐す。
將に謂えり、山中一事無しと、又、月色に随つて煙嵐を下す。

(1)浙江省の天台山の二峰。江西省九江県の南の廬山の二峰。(2)月の光。(3)山がすみ。山にたつもや。

又

一臥十年深鎖關 白雲明月照衰顔 丁丁伐木如相問 人在西山煙翠間

又

一臥十年、深く関を鎖す、白雲明月、衰顔を照らす。
丁丁たる伐木、如し相い問わば、人は西山煙翠の間に在り。

(1)長い間。(2)関門。出入口。(3)閉じる。(4)衰えた顔貌。老いた顔。(5)『詩經』の「小雅」に「伐木丁丁」とある。木を切る音の形容。(6)遠くの緑の森にかかる霞。

又

白雲深鎖舊青山 一枕清風萬境閑 入海泥牛絕消息 隨流菜葉到人間

又

白雲深く鎖す、旧青山、一枕の清風、万境閑なり。

海⁽⁶⁾に入る泥牛、消息を絶し、流れに随う葉葉、人間に到る。

(1)とじる。しめる。(2)昔。以前。(3)まぐらもと。(4)すべての所、場所。(5)静か。(6)没蹤跡なり。『五灯会元』龍山の章に「洞山、密師伯と經由す。溪流の葉葉を見る。洞曰く、深山に人無く、何に因つて葉有つて流れに随う。道人の居有ることを莫しや。乃ち共に議して艸を撥つて溪行すること五七里の間、忽ち師の羸形異貌を見て、行李を放下して問訊す。」とある。又「洞曰く、和尚、何んの道理を得て、便に此の山に住す。師曰く、我れ兩箇の泥牛闘つて海に入るを見る。直に今に至つて消息を絶す。」とある。

請雨

涸轍乾坤魚吻濡 斗升無水沃焦枯 哀哀父老蓼蓼鼓 不
爲風涼出舞雩^上

請雨

涸轍⁽¹⁾の乾坤⁽²⁾、魚吻⁽³⁾濡す、斗升⁽⁴⁾、水の焦枯⁽⁵⁾に沃ぐ無し。
哀⁽⁶⁾哀⁽⁷⁾たる父老⁽⁸⁾、蓼蓼⁽⁹⁾たる鼓、風涼⁽¹⁰⁾の為に舞雩に出でず。

(1)わだちの水たまりの乾いた所。(2)全世界。天と地。(3)『莊子』大宗師篇第六に出づ。「泉の水がかれ、魚が干上がった土の上に集まり、互いに湿った息を吹きかけあい、あぶくで濡らしあう。」これは儒家でいう仁愛を喻えたもの。(4)『莊子』外物篇に出づ。ほんの少しの水を意味する。(5)かわきかれる。乾ききった状態。(6)悲しんでやまないさま。いたましい。(7)老人の総称。(8)つつみの音。(9)すす風。南西の風。(10)天を祭つて雨の降るのを祈る祭り。

感懷

夜光明月必相照 枯木朽株能樹功 好是梁園古時竹 爲
誰葉葉起淒風⁽¹⁾

感懷⁽¹⁾

夜光⁽²⁾の明月、必ず相照る、枯木朽株、能く功⁽³⁾を樹つ。
好⁽⁶⁾し、是れ梁園⁽⁷⁾古時の竹、誰が為にか、葉葉⁽⁹⁾、淒風⁽¹⁰⁾を起す。

(1)風景など外界のものが心に触れる。詩人が思いを述べる時の題名に用いる。(2)夜の闇の中でも光るもの。夜行珠。(3)見る。(4)枯れた木と腐った株。共に役に立たないものの喩え。(5)手柄を立てる。(6)立派である。(7)漢代、梁の孝王の造った園で免園とも言う。王昌齡の「梁園詩」に「梁園の秋竹古時の烟、城下風悲しくして暮れんと欲する天」とある。(8)むかし。(9)炎が揺らぐ様に揺れる様。(10)すさまじく寒い風。

甲寅歲首

歲華三十二重非 一氣新從天上歸 東望關雲今不鎖 誰
家春艸綠依依

甲寅歲首⁽¹⁾

歲華⁽²⁾、三十二重⁽³⁾は非なり、一氣⁽⁴⁾新たに天上從り歸る。
東望⁽⁶⁾すれば、関雲⁽⁷⁾、今鎖す、誰家の春艸ぞ、緑依依⁽⁸⁾。

(1)享保十九年(一七三四)月船三十二才の時。(2)としつき。華は日月の光。光陰。(3)かさねる。くりかえし。(4)万物の根元となる力。天地の間にみなぎる大氣。(5)あつまる。おくる。(6)春。五行では四季の春を東にあてる。(7)雲によっておおわれる様子。(8)遠くてほんやりしたさま。

羅漢寺

青山一雨路參差 幽洞陰陰煙霧垂 撒手懸崖親問訊 半
千尊者不相欺⁽¹⁾

羅漢寺⁽¹⁾

青山一雨、路參差⁽²⁾、幽洞陰陰⁽³⁾として煙霧垂⁽⁵⁾る。

手を懸崖に徹して、親しく問訊すれば、半千尊者、相欺かず。

(1) 不明、現在は廃寺か。(2) 互いに入り交わるさま。(3) 奥深い洞窟。(4) うす暗くもの寂しいさま。(5) もや。かすみ。(6) 天からつりさがっている様に高くそそり立つ崖。(7) 放つ。(8) 挨拶のこと。(9) 五百羅漢。(10) だます。いつわる。

文殊寺

歴盡前三與後三 深深雲樹勝伽藍 點茶童子能看客 惟
有文殊不對談

文殊寺

前三と後三とを歴盡くして、深深たる雲樹、勝伽藍。
点茶の童子、能く客を見る、惟文殊のみ有つて対談せず。

(1) 不明。豊後に在ると言う。(2) 『碧巖録』三十五則「文殊前三」に出づ。(3) ことごとくつくして。(4) 奥深くかすかなさま。(5) 雲のかかった高い木。(6) すぐれた清浄閑静な修行の場。(7) お茶をしつらえる童子。(8) ただ。

寶福寺

寒巖古木梵王宮 憶昔高僧意氣雄 星落塔前千尺井 至
今粲彩在其中

寶福寺

寒巖古木、梵王宮、憶う、昔、高僧の意氣雄なることを。
星は落つ、階前千尺の井、今に至る、粲彩其の中に在り。

(1) 岡山県。東福寺派に属す。山号井山。(2) ひややかな巖頭。孤高超然とした悟りの境界に喩える。(3) 古びた木。(4) 仏法を守護する神の住む所。(5) 言い伝えでは、宝福寺の開山、鈍

庵和尚は、命によつて天災などの怒る前兆として現れた星をはらった所、その星が井戸に落ちた。その井戸を「千尺井」という。(6) 庭前。(7) 美しく、鮮やかである。

竹生島

大湖中湧小蓬萊 一望乾坤鏡裏開 綽約仙童何處去 四
絃曲罷水聲哀

竹生島

大湖中に湧く、小蓬萊、一望乾坤、鏡裏に開く。
綽約たる仙童、何の処にか去る、四絃、曲罷んで、水声哀れむ。

(1) 滋賀県。琵琶湖中の島。(2) 琵琶湖。(3) 神仙が住むという想像上の島で、渤海にあるという。蓬萊山とも。(4) すべてがその中で展開する。(5) ゆつたりとして、しとやかなこと。(6) 仙人に仕えている子供。(7) 琵琶。(8) おわる。

永源寺

疊疊青山祇樹幽 一聲鐘動夕陽樓 永源水脈難諳處 故
爲愁人日夜流

永源寺

疊疊たる青山、祇樹幽なり、一声、鐘動く夕陽の樓。
永源の水脈、諳んじ難き処、故に愁人の為に日夜流る。

(1) 滋賀県。現在は、永源寺派の本山。山号瑞石山。(2) 重なりあう。(3) 祇園精舎の林園。転じて寺のこと。(4) 十分に心得ている。知り尽す。(5) 心に憂え、悲しみを持つ人、もののあわれを感じる人。

廬山

遠近高低望不均 廬山風雨客愁新 眞成面目應難見 誰
道明明舉似人

廬山⁽¹⁾

遠近高低、望み均しからず、廬山の風雨、客愁新なり。⁽²⁾
眞成に、面目応に見難かるべし、誰か道う、明明に人に拳似すと。⁽³⁾

(1) 岐阜県。鹿苑寺の山号。現妙心寺派。(2) ひとしい。(3) 旅ごころ。旅中の寂しい思い。
まこと。本当。(5) たいへんはつきりしているさま。(6) 古則をことばで提示する。

禮大覺塔

無明窟裏弄精魂 此土他邦鬻破盆 夏倚庭前雙柏樹 西
來祖意有人論

大覺塔を礼す⁽¹⁾

無明窟裏に精魂を弄す、此土他邦、破盆を鬻ぐ。⁽²⁾
更に、庭前の雙柏樹に倚れば、西來の祖意、人の論ずる有らん。⁽³⁾

(1) 蘭溪道隆の塔。建長寺開山。大覺禪師と諡す。西來庵が塔所。(2) 蘭溪は、無明慧性の法
嗣。(3) たましい。(4) やぶれたすりばち。転じて無用のもの。(5) 売る。あぎなう。(6) 建長寺
には、開山手植の二本の栢樹がある。(7) よりかかる。因縁となる。

禮佛源塔

須彌槌子虚空鼓 驀地逢強不肯留 解道藏身沒影跡 那
知鼻孔搭唇頭

仏源の塔を礼す⁽¹⁾

須彌の槌子、虚空の鼓、驀地に強に逢つて、肯て留まらず。⁽²⁾
道うことを解す、身を藏して影跡を没せんと、那んぞ知らん、鼻孔の
唇頭に搭ることを。⁽³⁾

(1) 大休正念。仏源派祖。(2) 大休の遺偈に「拈起須彌槌、擊碎虚空鼓云々」を受けている。
(3) まっしぐらに。たちまち、地は助字。

住山

弧筇山又水 興盡罷奔馳 片石莓苔古 春眠落日遲

住山

狐筇山、又た水、興尽き、奔馳を罷む。⁽¹⁾
片石莓苔古たり、春眠落日遅し。⁽²⁾

(1) 不明。(2) さらに、そのうえ。(3) さかんになること。(4) 走り駆ける。水流などの速いさま。
(5) かけた石。(6) こけ。(7) ふるい。年月がたっている。(8) 春のねむり。(9) 夕日。

華清宮

珠殿瓊樓必險危 滿庭落葉夕陽垂 明皇不識仙家路 心
向五雲海外馳

華清宮⁽¹⁾

珠殿瓊樓、必ず險危、滿庭の落葉、夕陽垂る。⁽²⁾
明皇は識らず、仙家の路、心は、五雲海外に向かつて馳す。⁽³⁾

(1) 唐代に造られた宮殿。陝西省臨潼県。(2) 美しく立派な宮殿。(3) 美しいたかどの。(4) あや
うくする。危険な所。(5) 庭がいつぱいになる。(6) 「長恨歌」に依る。(7) 仙人の住む家。(8)

五色の雲。

寄友

住山山変好 擁耒種青松 湖海多相識 何人午睡濃

友に寄す

山に住すれば亦た好し、耒を擁して青松を種ゆ。
湖海、相識るもの多し、何人か午睡濃なる。

(1)すきを持つ。(2)世の中。世間。(3)ひるね。(4)深い。

送亡僧 七月十五日

江艸青青江水長 煙波何處是家郷 日逢自恣好消息 八
面清風吹旅裝 吹旅裝 相思鴈字問瀟湘

亡僧を送る 七月十五日

江艸青青、江水長し、煙波、何れの処か是れ家郷。
日、自恣に逢う、好消息、八面の清風、旅裝を吹く。
旅裝を吹き、相思わば、鴈字、瀟湘を問え。

(1)大きな川。川の総称。(2)もやがたちこめた水面。(3)ふるさと。故郷。(4)遠慮なく自他の罪を申し立てること。(5)すばらしい様子、有様。(6)あちらこちらから吹くすがすがしい風。(7)旅行のための身じたく。(8)たがいに思う。(9)雁の飛ぶ様子を文字に喩えた。(10)瀟水と湘水の合している地。瀟湘八景の名勝の地。

與楚玉 因事退席

雨過荆山翠鎖春 維眞維假滿盤新 由來但欠臨風泣 那
怪今逢按劍人

楚玉に与う 事に因つて退席す

雨過ぎて、荆山の翠、春を鎖す、維れ眞、維れ假、満盤新なり。
由來、但だ風に臨んで泣くことを欠く、那んぞ怪まん、今、劍を按ん
ずる人に逢うことを。

(1)下下が荆山でみがない宝玉を発見し、楚の厲王に献じたが信じられず、左足を切られ、武王に献じたが信じられず、右足を切られ、文王に献じて玉人にみがかせ宝玉を得た故事。(2)みどり。(3)春そのものである。(4)すべての取りまくもの。(4)眞・假は、本物とにせもの。(5)もともと。よってきたる所。いつたえ。(6)風にあたる。風に吹かれる。(7)劍のつかに手をかける。

宗鈍禪人赴長松之命

百丈山頭翻淨瓶 慚惶滿面強惺惺 若過峭絶無人處 落
落長松帶雪青

宗鈍禪人、長松の命に赴く

百丈山頭に淨瓶を翻す、慚惶滿面、強いて惺惺。
若し峭絶無人の処に過らば、落落たる長松、雪を帯びて青からん。

(1)福島県。妙心寺派。山号大雄山。(2)旧名を大雄山という。江西省にある。百丈懷海によつて開創。(3)淨水を貯える瓶。『無門関』四十則「趯倒淨瓶」の話がある。(4)はじおそれる。(5)無理に。(6)分明なさま。心のあきらかなさま。(7)非常に険しい。険絶。(8)ひととき高いさま。

佛生日

飢來喫飯冷添衣 誰向西山歌菜薇 綠樹陰森過雨後 杜鵑猶叫不如歸

佛生日

飢え来たれば飯を喫し、冷かなれば衣を添う、誰か西山に向かって采薇を歌う。
緑樹陰森たり、過雨の後、杜鵑、猶お叫ぶ不如歸。

(1)四月八日、降誕会。(2)『中峰語録』に有り。(3)首陽山、周の初め伯夷と叔斉が餓死したという山。(4)伯夷と叔斉が周の穀物を食べるのを恥じ、首陽山にかくれて餓死したが、その時歌った歌。(5)うす暗くもの寂しい。(6)通り雨、ひとしきり降る雨。(7)ほととぎす。ほととぎす。

又

周行七步事何繁 天上人間唯我尊 杜宇聲寒簾外雨 老僧無暇效雲門

又

周行七步、事何んぞ繁き、天上人間、唯我尊。
杜宇声寒、簾外の雨、老僧、雲門に效うに暇無し。

(1)歩き回る。(2)出来事。(3)天地間の中で、ただ自分のみが尊い。(4)ほととぎす。(5)寂しい、寒々とした。(6)簾の外、戸外。(7)『雲門録』に「世尊、初め生下して、一手は天を指し、一手は地を指し、周行七步、四方を目顧して云く、天上天下唯我独尊と。師曰く、当時、若し見ば一棒に打殺して狗子に与えられて喫却せしめん。貴ぶらくは天下太平を図らん。」とある。(8)まねをする。(9)ゆつくりとする。ひま。

佛涅槃

桃李春風海燕回 尸羅城裏買棺材 臨行特地現雙足 金
色頭陀笑滿腮

佛涅槃

桃李の春風、海燕回る、尸羅城裏、棺材を買う。
行に臨んで、特地に双足を現ず、金色の頭陀、笑い滿腮。

(1)二月十五日。(2)もともとすもも。(3)うみつばめ。(4)拘尸那竭羅。釈尊入滅の地。(5)ひつぎの材料。(6)臨終。生より死に遷る瞬間。(7)特別に。ことさら。地は助字。(8)摩訶迦葉のこと。(9)あこ。

佛成道

人自金剛座上來 回頭生界歎奇哉 那時不敢脫珍御 又
掛垢衣一笑開

佛成道

人は金剛座上自り来つて、頭を生界に回して、奇なる哉と歎ず。
那時、敢えて珍御を脱せず、又、垢衣を掛けて、一笑開く。

(1)十二月八日。(2)仏陀が悟りを得た所。(3)衆生界。(4)いづれの時。いつ。(5)めずらしく貴い服御の品。『禪苑清規』に「珍御之龍衣」とある。(6)よごれた衣服。(7)ほほえんでいること。

達磨忌

魏使從來不識他 半途撞著笑呵呵 風霜十萬八千里 無
那手中隻履多

達磨忌⁽¹⁾

魏使⁽²⁾從來⁽³⁾、他を識らず、半途⁽⁴⁾に撞著⁽⁵⁾して、笑い呵呵⁽⁶⁾。
風霜⁽⁷⁾、十萬八千里、手中隻履の多きを那⁽⁸⁾んともすること無し。

(1)十月五日。(2)魏の宋雲。(3)宋雲と達磨が葱嶺で出会った故事。『五灯会元』達磨章に出づ。
(4)もともと。もとから。(5)道や物事の途中。中途。(6)突きあたる。(7)笑い声。笑うさま。
(8)風と霜。年々の変遷。年月。(9)たくさんあること。(10)どうすることも。

又

遙觀茲土有茲器 得得來時復若何 萬戶清霜砧杵動 同
頭隻履過流沙

又

遙かに觀る、茲の土に器有ることを、得得として來たる時、復た若何
ん。
萬戶清霜⁽⁴⁾、砧杵⁽⁵⁾動く、頭⁽⁷⁾を回らせば、隻履⁽⁶⁾、流沙⁽⁸⁾を過ぐ。

(1)『碧巖錄』第一則の評唱に出づ。「達磨遙かに此土に大乘の根器有るを觀て、遂に海に泛
んで得々として來り、心印を單伝して迷塗を開示す。云々」とある。(2)大乘の機根をもつ
人物。(3)わざわざ。(4)李白「子夜吳歌」に「萬戶擣衣声」とある。(5)清らかな霜。(6)きぬ
たときね。(7)ふり帰る。來た所へ帰る。(8)砂が流れて移動する。

又

謾言直指復單傳 藏證分明現面前 只是雪庭無半臂 終
令隻履向西天

又

謾⁽¹⁾に言う、直指、復た單伝と。藏證分明に、面前に現ず。
只、是れ雪庭、半臂無し、終に隻履をして西天に向かわしむ。

(1)そぞろ。みだりに。(2)盗みの証拠。(3)ただうだけ。だが。しかし。

又

上界鐘鳴霜滿天 青燈白髮擁爐眠 虛空踏破一雙履 早
被胡僧得半邊

又

上界⁽¹⁾、鐘鳴り、霜天⁽²⁾に滿つ、青燈白髮、爐⁽³⁾を擁⁽⁴⁾して眠る。
虛空踏破⁽⁵⁾す、一隻履、早く胡僧に半邊⁽⁷⁾を得らる。

(1)天上の世界。神仙や神仏の住む所。(2)空いっぱいになる。(3)手あぶり。火ばち。(4)だき
かかえる。(5)歩き尽す。破は動詞の後について動作を徹底的にする。(6)印度の僧を呼称し
ていう。又達磨のこと。(7)かた一方。

上已

數盡恒河沙復沙 積功累德漫無涯 江山千里春如錦 惟
有靈雲不見花

上已⁽¹⁾

數え尽す、恒河沙⁽²⁾、復た沙、積功累德⁽³⁾、漫として涯無し。
江山千里、春錦の如し、惟だ靈雲⁽⁵⁾のみ有って花を見ず。

(1)陰曆三月上旬の巳の日。桃花の節、三月三日の日。(2)無量無辺のこと。(3)てがらを積み重ね徳を積み重ねること。(4)瀧山の法嗣、靈雲志勤が桃花を見て悟った故事。

雪夜

乾坤供病懶⁽¹⁾ 白髮石爐煙 簾外風吹雪 鰲山應未眠

雪夜

乾坤、病懶⁽¹⁾に供し、白髮、石爐の煙。

簾外、風、雪を吹く、鰲山⁽²⁾、応に未だ眠らざるべし。

(1)病によるものうさ。(2)湖南省常德県の北、虎歯山とも。雪峯と巖頭が鰲山に至り、雪にとざされた時、巖山はひたすら寝り、雪峯は坐禅ばかりしていたという故事。

對雪

北風吹雪入遙天 白髮蕭蕭石榻眼 三等僧分簾外與 不知片片落誰邊

雪に對す

北風、雪を吹き、遙天⁽¹⁾に入る、白髮蕭蕭⁽²⁾として、石榻⁽³⁾に眠る。
三等⁽⁴⁾の僧は分かる、簾外の与、知らず、片片⁽⁵⁾、誰が辺に落ちるを。

(1)はるかな天。(2)のどかなさま。もの寂しいさま。(3)石でできたながいす。(4)『大慧武庫』の円通秀禪師の章に「雪の下に三種の僧有り、上底は、僧堂裏に坐禅す。中等底は、墨を磨り、筆を点じて雪の詩を作る。下等は、爐を圍つて食を説く」とある。(5)『碧巖録』四十二則に「龐居士好雪片片」の則にある語。

訪人不值

寒水蕭蕭對翠屏 暮雲歸鳥故人局 芭蕉葉葉秋風起 閑卻床頭一軸經

人を訪ねて値わず

寒水蕭蕭として翠屏⁽¹⁾に對す、暮雲⁽²⁾歸鳥、故人⁽³⁾の局。芭蕉葉葉⁽⁴⁾、秋風起る、閑却⁽⁵⁾す、床頭一軸の經。

(1)みどり色の屏風。青い山が連なっているさまの形容。(2)夕ぐれ雲。(3)出入口。戸口。(4)そよそよと風にゆらいぐさま。(5)すてておく。なおざりにする。

又

一夜秋風吹樹梢 柴門月下有人敲 不知黃鶴摩天去 孤頂寒松問舊巢

又

一夜の秋風、樹梢⁽¹⁾を吹く、柴門、月下に人の敲く有り。
知らず、黃鶴、天を摩⁽²⁾し去ることを、孤頂の寒松、旧巢を問う。

(1)こずえ。(2)かすめる。迫る。

世尊拈華

芙蓉雨初霽 香艷溢前池 起坐妙窻夢 昭陽玉漏遲

世尊拈華

芙蓉⁽²⁾、雨初めて霽る⁽³⁾、香艷⁽⁴⁾、前池⁽⁵⁾に溢る。
起坐す、妙窓の夢、昭陽⁽⁶⁾、玉漏⁽⁷⁾遅し。

(1)『無門関』第十六則に出づ。『大梵天王問仏決疑經』(偽經)に依る。(2)はすの花。(3)はれる。雨があがる。(4)何ともいえないよい香り。(5)あふれる。(6)漢の武帝が建てた宮女の住む御天の一つ。(7)玉でかざった宮中の水時計。

外道問佛

有言無言吹毛冷 老倒外道呼不省 惟正惟邪日麗天 叵耐良馬窺鞭影

外道問仏

有言無言、吹毛冷し、老倒たる外道、呼べども省せず。
惟れ正、惟れ邪、日天に麗く、叵耐なり、良馬の鞭影を窺うことを。

(1)『無門関』第三十二則『碧巖録』六五則に出づ。(2)『碧巖録』百則の評唱に「剣刃上に毛を吹き、之を試みるに、其の毛、自ら断ず、乃ち利剣、之を吹毛と謂う」とある。(3)老いてよばよばしている様。(4)着付と同じ。『易経』に「日月天に麗く」とある。(5)『正字通』に「叵耐は耐えるべからず」とある。(6)『碧巖録』第六五則本則に出づ。

徳山托鉢

大小徳山少一句 巖頭密啓語何繁 果然來日商量別 活
得三年亦斷魂

徳山托鉢

大小の徳山、一句を少く、巖頭の密啓、語何んぞ繁き。
果然として、来日商量別なり、活、三年を得るも、亦た断魂。

(1)『無門関』第十三則に出づ。(2)あれ程の。(3)欠ける。(4)『無門関』「徳山托鉢」の中に「巖頭、密かに其の意を啓す」とある。(5)果たして、案の定。(6)相談する。協議する。『祖庭事苑』の中に「商量は、商賈の量度して中平を失せざる、以て各の其の意を得せ使むるが如

し」とある。(7)『五灯会元』の巖頭章に徳山托鉢の段の最後に「然りと雖ども、也た祇だ三年の活を得。」とある。

石霜遷化衆請首座住持

休去歇去白練去 一色邊事無憑據 香煙未斷又何之 山中雲滾不知處

石霜遷化、衆、首座を請じて住持せしむ

休し去り、歇し去り、白練にし去る、一色辺の事、憑拠無し。
香煙未だ断えず、又、何んが之く、山中雲深く、処を知らず。

(1)『五灯会元』に「石霜慶諸禪師、道吾の智に嗣ぐ。石霜の法嗣、九峰道虔禪師、嘗って石霜の侍者と為る。霜の帰寂に泊す。衆、首座を請じて住持を継がしめんとす。師、衆に白して曰く、須らく先師の意を明らめ得て、始めて可なるべし。座曰く、先師に甚魔の意が有る。師曰く、先師道く休し去れ、歇し去れ、冷湫地にし去れ、一念万年にし去れ、寒灰枯木にし去れ、古廟の香爐にし去れ、一条の白練にし去れ。其の余は則ち問わず」とある。(2)「石霜七去」と言われ、石霜の示寂後、法嗣の九峰が、石霜の語として七去を示し、首座を勧諭した。七去とは、学人の修行のありようを述べたもの。(3)差別相對を越えた平等の世界、またけがれを取り去った浄潔の境界をいう。

又

枯木寒灰一色邊 堂中首座坐香煙 到頭未盡先師意 頼
值侍司有道虔

又

枯木寒灰、一色辺、堂中の首座、香煙に坐す。
到頭、未だ尽さず先師の意、頼に侍司に道虔有るに値う。

(1) 石霜七去の五、情識分別の一点もないこと。(2) 石霜七去の六の古廟香炉去を受けたもの。
(3) 結局のところ。(4) 九峰道虔のこと。

牛過窓櫺

五祖山中頭角露 大家隨分納些些 至今不敢桃林放 謾
隔窗櫺爭尾巴

牛、窓櫺を過ぐ

五祖山中に頭角露る、大家、分に随つて些些を納む。
今に至り、敢えて桃林に放たず、謾に窓櫺を隔てて、尾巴を争う。

(1) 『無門関』第三八則に出づ。(2) 湖北省黄梅県にある。五祖弘忍開山の真慧寺があり、五祖山と言う。(3) 頭のさき。(4) みんな。(5) 些々はわずか。『会元』に南泉、衆に示して云く、王老師、小自り一頭の水牯牛を養う。溪東に向つて牧せんと擬すれば、免れず、他の国王の水牯を食ことを。溪西に向つて牧せんと擬すれば、亦た免れず、他の国王の水牯を食すること。如今、免れず、分に随つて些些を納め、総に見得せざらんには」とある。(6) 『尚書』の武成に「王、商より来つて豊に至り、乃ち武を偃め、文を脩む。馬を華山の陽に歸し、牛を桃林の野に放つ。天下に復た兵を用いざることを示す。」とある。

馬祖翫月

禪入海兮經入藏 江西乘月客充堂 誰令普願跽跳去 元
是簸箕颺糝糠

馬祖、月を翫ぶ

禪は海に入り、經は藏に入る、江西、月に乗じて、客、堂に充つ。
誰か普願をして、跽跳し去ら令む、元と是れ簸箕、糝糠を颺ぐ。

(1) 馬祖道一と法嗣の百丈、西堂、南泉の三人が月見をした時の商量。(2) 『五灯会元』に「江

西の馬祖道一禪師に一夕、西堂百丈南泉隨侍す。月を翫ぶ次で、師問う、正怎麼の時如何ん。堂曰く、正に好供養。丈曰く、正に好修行。泉、拂袖して便ち行く。師曰く、經は藏に入り、禪は海に歸す。唯だ普願のみ有つて、独り物外に超ゆ。」とある。(3) 南泉普願。(4) 『五家正宗贊』の馬祖章に「師、法を南嶽に得。後、蜀に歸り、郷人喧しく之を迎う。溪辺の婆子曰く、將に謂えり、何の奇特か有らん。元と是れ馬簸箕家の小兒と」とある。(5) こまごまとしたもの。役にたたないものの喩。

洞山見龍山

兩箇泥牛鬪未休 不知何處覓蹤由 相逢勿問住山趣 菜
葉謾隨溪水流

洞山、龍山に見ゆ

兩箇の泥牛、鬪つて未だ休まず、知らず、何の処にか蹤由を覓めん。
相い逢つて問うこと勿れ、住山の趣、菜葉、謾に溪水に随つて流る。

(1) 『五灯会元』の龍山章に「潭洲の龍山和尚、洞山、神山と行脚す。溪流菜葉するを見る。山云く、此の中に必ず修行の人有り。遂に往き尋ねて庵主に見ゆ」とある。龍山は馬祖を嗣ぐ。得法の後、龍山に入り一生下山しなかつた。洞山、神山が行脚し、龍山と会つて問答を行った故事。(2) 問答中に「又問う、和尚、何んの道理をか得て、此の山に住す。師云く、我れ兩箇の泥牛鬪つて海に入るを見て、直に如今に至つて消息無し」とある。(3) 蹤跡由来の意。あとかた。

土地神禮洞山

大人境界天然別 凡聖由來覓沒蹤 一念生時全體現 驢
腮馬腮領紫金容

土地神、洞山を礼す

大人の境界、天然別なり、凡聖の由来、覓むるに蹤を没す。

一念生ずる時、全体現ず、驢腮馬額、紫金の容。

(1)『碧巖錄』第九十七則評唱に「洞山和尚、一生住院、土地神他の蹤跡を蹤むるに見えず。一日厨前に米麴を抛撒す。洞山心を起して曰く、常住の物色、何ぞ作踐すること此の如きことを得たると。土地神、遂に一見することを得て、便ち礼拝す」とある。(2)うばのあごと馬のあご。ありとあらゆるものごとのこと。(3)紫色をした最上の黄金。

語黙涉離微

五更漏盡又添更 碧殿深沈夢未驚 鼓動漁陽花滿地 那
知殘月鎖華清

語黙、離微に渉る

(2)五更漏れ尽きて、又更を添う、碧殿深沈として、夢、未だ驚かず。
(3)鼓、漁陽に動いて花滿地、那ぞ知らん、殘月の華清を鎖さんとは。

(1)『無門関』第二十四則に出づ。「風穴和尚、因に僧問う、語黙離微に渉る。如何んが不犯を通ぜん。穴云く、長えに憶う江南三月の裏、鷓鴣啼く処百花香し。』『宝藏論』の離微体淨品に「離微」について述べられている。(2)『開元遺事』に「宮漏に六更有り、君主、宴起を得」とある。宮漏とは、宮中にある水時計。(3)白居易の「長恨歌」に「漁陽の鼙鼓、地を動かしかる」とある。漁陽は、唐の玄宗皇帝の時、安祿山が反乱の兵をあげた所。

香巖上樹

郎當香巖不知老 樹上懸身空懊惱 無端卻問樹下句 大
地山河笑且倒

香巖上樹

(2)郎當たる香巖、老を知らず、樹上に身を懸けて、空しく懊惱す。
(4)端無く却って樹下の句を問えば、大地山河、笑って且つ倒る。

(1)『無門関』第五則に出づ。『五灯会元』には「香巖の智閑禪師、上堂す、若し此の事を論ずれば、人の樹に上るが如し。口に樹枝を銜み、脚は枝を踏まず、手は枝を攀じず。樹下に忽ち人有つて、如何なるか是れ祖師西来意と問う。若し他に対えば即ち喪身失命す。対えざれば則ち又他の所問に違ふ。恁麼の時に當つて作麼生か即ち得ん。時に虎頭上座有つて衆を出でて云く、樹上をば即ち問わず、未だ樹に上らざる時、請う和尚道え。師乃ち阿大笑す」とある。(2)よばよばしていること。老いばれて力のない様。(3)なやみもだえる。(4)端緒。いとぐち。

南泉油糍

鼓寂鐘沈日色遲 南泉背手竊油糍 不因侍者看莊主 棒
折何會放過伊

南泉油糍

(1)鼓寂に鐘沈んで日色遅し、南泉背手に油糍を竊む。
(2)侍者の莊を見るに因らずんば、棒折るとも、何んぞ曾つて伊を放過せん。

(1)『禪林類聚』に「南泉一日堂に赴かず。侍者請して堂に赴かしむ。師曰く、我れ今日、莊上に在つて油糍を喫して飽く。者云く、和尚、曾つて出入せず。師云く、汝去つて莊主に問え。者、方に門を出んとし、忽ち莊主の帰るを見る。和尚の莊に到つて油糍を喫するを謝す」とある。糍も糴も同じ字である。(2)『敕修清規』に「莊主は田の界至を視て、莊舎を修理し、農務を提督し、莊佃を撫安す」とある。

又

不赴堂兮不到莊 油糍容易入枯腸 出門忽見人來謝 應
問南泉午睡長

又

堂に赴かず、莊に到らず、油餐、容易に枯腸に入る。⁽¹⁾
門を出でて忽ち見る、人來たり謝することを、応に南泉の午睡の長きを問うなるべし。

(1) かれたはらわた。おなかのへった様。

倩女離魂

聲聲月上暮村砧 萬里秋風一片心 寄語茂陵多病客 翠帷夢冷白頭吟

倩女離魂⁽¹⁾

声声月上、暮村の砧、万里の秋風、一片の心。
語を寄す、茂陵⁽²⁾多病の客、翠帷⁽³⁾、夢冷やかなり、白頭吟⁽⁴⁾。

(1) 『無門関』三十五則に「五祖、僧に問うて云く、倩女離魂、那箇か是れ真底」とある。
(2) 陝西省興平県の北東。『史記』の司馬相女の伝に「既に病免して茂陵に家居す」とある。
(3) みどり色のとばり。婦人の寢室。(4) 司馬相女が茂陵の女を迎えようとした時、妻の卓文君が白頭吟という詩を作つて離婚の意を示したので相如がその女を聘するのをやめたという故事。

三玄三要

一句中具三玄門 一玄門有三要路 自從要路入玄門 入得玄門無一句 無一句時無三玄 何處更尋三要路 笑倒濟北小廝兒 生鐵稱被蟲蛀

三玄三要⁽¹⁾

一句中に三玄門を具し、一玄門に三要路有り。

要路自從り、玄門に入り、玄門に入得すれば一句無し。
一句無き時三玄無し、何れの処にか三要路を尋ねん。
笑倒す、濟北の小廝兒、生鐵⁽³⁾の稱鎚、蟲に蛀⁽⁴⁾まちる。

(1) 『臨濟録』の上堂に「一句語に須らく三玄門を具すべし、一玄門に須らく三要を具すべし」とある。三玄とは、体中玄、句中玄、玄中玄、三要とは、汾陽善昭によれば、第一要は、分別造作のない言語をいい、第二要は、千聖がそのまま玄要に入ることであり、第三要は、言語を絶したものであるとする。(2) 『臨濟録』に「臨濟小廝兒」とある。こせがれ。小僧っ子。(3) まじりけのない鉄。(4) むしばむ。

風穴垂語云若立一塵

風下起兮雲不揚 千年家國忽衰亡 一歌一拍村田樂 笑倒魯戈擣夕陽

風穴垂語して云く、若し一塵を立すれば⁽¹⁾

風起らず、雲揚らず、千年の家國、忽ち喪亡す。

一歌一拍、村田樂、笑倒す、魯戈⁽⁴⁾の夕陽を擣くことを。

(1) 『碧巖錄』第六一則に「風穴垂語して云く、若し一塵を立すれば家國興盛し、一塵を立てざれば、家國喪亡す。雪竇拄杖を拈じて云く、還つて同生同死底の衲僧有りや」とある。
(2) 『史記』の高祖本記に「高祖、筑を撃つて自ら歌詞を為りて曰く、大風起り、雲飛び威を揚ぐ、海内に加えて故郷に帰る」とある。(3) 石門來禪師の村田樂の偈に、「意舞伴歌取次に行なわる、鼓声嘈雜、笛悠揚、玉堂の金馬、吾が事に非ず、土甕の新蜀、晚粒香し」とある。(4) 『淮南子』の覽冥訓に「魯陽公、韓と難を構う、戦い酣にして日暮れる。戈を援いて搗く。日、之が為に反ること三舍」とある。魯陽がほこで夕日を招き返した故事。

又

興國好須隨汝後 亾家何必在吾前 同生同死無人問 七尺烏藤壁上眠

又

國を興すことは好し、須らく汝が後えに随うべし、家を亡ずることは、何んぞ必ずしも吾が前に在らん。

同生同死、人の問う無し、七尺の烏藤、壁上に眠る。

(1) 山から取ったままの荒々しい杖。

僧問大龍色身敗壞

色身敗壞人何在 好賣布單問大龍 將謂春山花似錦 飛

隨澗水去無蹤

僧、大龍に問う、色身敗壞す

色身敗壞す、人何んが在る、好し、布單を売って大龍に問う。

將に謂えり、春山、花錦に似たりと、飛ん澗水に随って、去って蹤無し。

(1) 『碧巖錄』第八十二則に「僧、大龍に問う、色身敗壞す、如何なるか是れ堅固法身。龍云く、山花開いて錦に似たり、澗水湛えて藍の如し」とある。(2) 眠單のおおい。ねまきの類。

映嶠摩羅值長者婦產難

有婦產難 賢歩聖趨 纔說不殺 兒泣呱呱

(1) 映嶠摩羅、長者の婦の產難に值う

婦有り、產難す、賢歩し聖趨る。
纔かに不殺と説けば、兒泣いて呱呱。(2)

(1) 『禪林類聚』に「映嶠摩羅、因に持鉢して城に入る。一りの長者の家に到り、其の婦の產難に值う。長者告げて云く、沙門は是れ仏弟子。何の方便が有って我が家の難産を救い得ん。映嶠云く、我れ乍して道に入る、未だ此の法を知らず、当に去って仏に問うて却來して相報すべし。乃ち遽に返って仏に白して、具さに上の事を陳ぶ。仏に告げて云く、汝速かに去って説け。我に賢聖の法あつて自從り來て、未だ曾って殺生せず。映嶠、仏の所説に依つて、往きて長者に告ぐ者の、婦、之を聞いて當時に分免す。母子平安なり」とある。(2) 小供の泣き声。

瀉山到國清受戒

一自靈山別 三回作國王 舊盟猶可問 拄杖不爭長

(1) 瀉山、國清に至つて受戒す。

一たび靈山に別れて自り、三回國王と作る。

旧盟、猶を問う可し。拄杖の長きことを争わず。

(1) 『禪林類聚』に「瀉山、沙弥と作りし時、天台國清に往き受戒す。寒山預じめ知つて拾得と同じゅうして松門に往きて接す。師、纔かに到る。二人路傍從り跳出し大蟲の吼を作すこと三声。師、對え無し。山曰く、靈山に一別して自從り、今に至る迄、環つて記得すや。師亦た對え無し。拾得、拄杖を拈じて云く、你、這箇を喚んで甚麼とか作す。師亦た對え無し。山云く、休みね休みね。問うことを用いざれ。他、別れて自り後、已に三生、國王を作り來り、總に忘却し了れり」とある。

興化罰克賓

一場法戰克賓窮 五貫罰錢興化通 永夜幽人眠不得 蕭

蕭秋雨送梧桐

興化、克賓を罰す⁽¹⁾

一場の法戦、克賓窮し、五貫の罰銭、興化通ず。
永夜の幽人、眠ること得ず、蕭蕭たる秋雨、梧桐を送る。

(1)『五灯会元』の興化章に「師、克賓維那に謂って曰く、汝、久しからずして唱道の師と為る。賓曰く、この保社に入らず。師曰く、会し了つて入らざるか、会し了らずして入らざるか。曰く、総に不与麼。師便ち打つて曰く、克賓維那、法戦に勝てず、罰銭五貫。簞飯を一堂に設く。次の日、師自ら白槌して曰く、克賓維那、法戦して勝てず、喫飯することを得ず、即便ち出院す」とある。

女子出定

江水漫漫江鴈悲 行人千里誤歸期 玉堂三月空階雨 好
及榮華未落時⁽¹⁾

女子出定⁽¹⁾

江水漫漫、江雁悲しむ、行人、千里帰期を誤る。

玉堂三月、空階の雨、好し、榮華の未だ落ちざる時に及べ。

(1)『無門関』四十二則に「世尊、昔、因みに文殊、諸仏の集まる処に至つて、諸仏各の本処に還るに値う。惟だ一女人有り、彼の仏座に近づいて三昧に入る。文殊乃ち仏に白さく、云何んぞ女人は仏座に近づくを得て、我は得ざる。仏、文殊に告ぐ、汝但だ此の女を覺して三昧より起たしめて、汝自ら之を問え。文殊、女人を遶ること三匝、指を鳴らすこと一下して、乃ち托して梵天に至つて、其の神力を尽すも出すこと能わず。世尊云く、仮使い百千の文殊も亦た此の女人を定より出だすことを得ず。下方一十二億河沙の国土を過ぎて

罔明菩薩有り。能く此の女人を定より出ださん。須臾に罔明大士、地より湧出して世尊を礼拝す。世尊、罔明に勅す。却つて女人の前に至つて指を鳴らすこと一下す。女人是に於て定より出づ」とある。

瀉山心識微細流注

人道瀉山業識乾 七年流注似奔湍 險崖句子清風起 有
主沙彌不敢瞞⁽¹⁾

瀉山、心識微細の流注⁽¹⁾

人は道う、瀉山の業識乾くと、七年の流注、奔湍に似たり。⁽²⁾
險崖の句子、清風起る、有主の沙彌、敢えて瞞ぜず。⁽³⁾

(1)『虛堂錄』に「瀉山、仰山に問う、寂子心識微細の流注無くし来たること幾年ぞ。仰山敢えて答えず。却つて云く、和尚無くし来たること幾年ぞ。瀉山云く、老僧無くし来たること已に七年。瀉山又寂子に問う、如何ん。仰山云く、慧寂は正に闢し。」とある。心意識に生ずる微細な煩惱の相談不斷のさま。(2)水の早く流れる処。(3)師について得度した弟子。『五灯会元』に「仰山の慧寂禪師、瀉山の祐を嗣ぐ。瀉山問うて曰く、汝はれ有主の沙弥か、無主の沙弥か。師曰く、有主。曰く、主、什麼の処に在る。師、西従り東に過ぎて立つ」とある。

僧問「香嚴如何是佛法大意」嚴曰「今年霜降早蕎麥總不収
無地無錐只魔休 幾人問佛開啾啾 秋來殊學霜降早 蕎
麥今年總不収⁽¹⁾

僧⁽²⁾、香嚴に問う、如何なるか是れ仏法の大意、嚴曰く、今年霜降
ること早し、蕎麥⁽²⁾、総に収めず。

地無く、錐無し、只麼に休す、幾く人か仏を問うて開啾啾。⁽⁴⁾

秋来たり殊に覚ゆ、霜の降ること早きことを、蕎麦、今年、総に収めず。

(1)『五灯会元』卷九香嚴伝にあり。(2)そば。(3)『五灯会元』の香嚴章に仰山との問答の中の頌に「去年の貧は未だ是れ貧にあらず、今年の貧は始めて是れ貧、去年の貧は猶卓錫の地有り、今年の貧は、錫も也た無し」とある。『漢書』の食貨志に「秦民の富める者の田、阡陌を連ね、貧しき者は、錫を立てるの地無し」とある。(4)聞はそうぞうしいこと。虫、獸、鳥などが多く鳴く声。亡霊の泣く寂しい声。

僧問香林如何是祖師西來意林曰坐久成勞

坐久成勞 前躬後仰 借手香林 滿意搔痒

僧⁽¹⁾、香林に問う、如何なるか是れ祖師西來意、林曰く、坐久成勞。

坐久成勞、前⁽²⁾に躬まり、後⁽³⁾に仰ぐ。

手を香林に借りて、滿意に痒りを搔かしむ。

(1)『碧巖錄』一七則に出づ。(2)長い間おつかれさんでしたの意。説法の終わりに師家より学人への挨拶として言う語。(3)『禪苑清規』の坐禪儀に「不得左傾右側前躬後仰」とある。

秀才問長沙

諸佛百千名已傳 不知何土示隨緣 秋風黃鶴樓前色 期
你得閑題一篇

秀才⁽¹⁾、長沙に問う

諸仏の百千名、已に伝う、知らず、何れの土にか隨縁⁽²⁾を示す。

秋風、黃鶴樓前の色、期す、あなたが閑を得て一篇を題せんことを。

(1)『五灯会元』長沙の景岑禪師の章に「秀才有り、千仏名経を看て問うて曰く、百千の諸仏、但だ其の名を見る、未審し、何れの国土にか居し、還つて物を化すや也た無しや。師曰く、黃鶴樓の崔顥、詩を題して後、秀才還つて曾つて題すや也た未だしや。曰く、未だ曾つて題せず。師曰く、閑を得て一篇を題取せば好し」とある。(2)因縁に隨順する。

玉潤頌雲門北斗藏身之縁

南斗現身北斗藏 雲門脚踏謾彷徨 雖然玉潤無雙眼 五
祖誣人不自量

玉潤⁽¹⁾、雲門の北斗藏身の縁に頌す

南斗に身を現じ、北斗に藏る、雲門脚踏えて謾に彷徨す。

然も玉潤に双眼無しと雖ども、五祖⁽⁴⁾、人を誣う、自ら量らず。

(1)『林間錄』玉潤伝の中に雲門の北斗藏身の因縁についての偈に「北斗藏身為に挙揚す、法身此れ從り露堂堂、雲門、他家の子を賺殺して、直に如今に至り、謾に度量す」とある。(2)『五灯会元』に「師、睦州に参ず、乃方門を叩く。州、門を開く。便ち摛住して曰く道え道え。師擬議す。州便ち推し出して曰く、秦時の轆轤鑽。遂に門を掩う。師の一足を損す。」とある。(3)さまよう。(4)五祖師戒、双泉師寛を嗣ぐ。五祖山に住す。